慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国家政策に於ける統計の任務と限界
Sub Title	
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.10 (1940. 10) ,p.1547(209)- 1580(242)
JaLC DOI	10.14991/001.19401001-0209
Abstract	
Notes	皇紀二千六百年慶應義塾大學部設立五十年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19401001-0209

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國家政策に於ける統計の任務と限界

寺尾琢磨

目次

一、統計及び統計學に於ける國家的性格の消長
二、國防國家に於ける統計任務の擴大
三、統計の政策性に對する妨碍的要素
(1) 統計の本質より來る妨碍
(2) 統計の技術より來る妨碍
四、結論——國家政策に於ける統計の限界

一、統計及び統計學に於ける國家的性格の消長

統計の性格は發生的に既に國家的である。統計の初期の形態は古代の人口統計であるが、言ふ迄もなく國家の中

心的構成要素たる人口の大さと構成狀態乃至はその變化を正確に把握することは、國家活動の不可缺の前提である。併し斯かる內容をもつ人口統計は遙かに後の産物であつて、初期の社會に於てはその形態は極めて單純なものであつた。而もその素朴な人口統計も極めて緊急な國家的必要によつて促されたもので、背後に横はる政治的誘因は寧ろ今日よりも强烈だつたとも言へる。當時の人口調査は一般に生産年齡男子に限定され、調査事項も極めて簡單であつたと思はれるが、これは調査の目的が徴兵と徴稅といふ最も基本的な國家生存の要求に出でたからに外ならない。換言すればその素朴さが却つて率直に當時に於ける統計の國家性を示顯してゐるのである。羅馬時代に至つて人口調査は遙かに整備されたが、これは國家活動の擴大に伴ふ當然の措置に外ならず、統計の國家性は何ら減殺されず、寧ろ一段と高揚されたのであつた。故に文化が地を拂ひ强力國家が影をひそめた中世の永い暗黑時代に、統計に關する一つの努力すら認められなかつたのも不思議はない。後になつて歐洲に多少とも有力な國家が再建されると共に、古代に人口調査を促した誘因も復活し、一〇八三—六年にヴキリアム征服王の作成せしめた Domesday Book はその最も卓ける星として暗澹たる中世の空を飾つたのである。

近世に入つて强大な專制主義國家が現はれるに及び、國家の能動的活動範圍は急激に擴大され、これに伴つて統計の必要は著しく痛感されるに至つた。殊に重商主義の下に國家が對外貿易を一定の方嚮に導くに當つては、經濟部門に關する諸統計が缺く可らざる前提となつたのである。

統計の國家的政治的性格がその初期の時代から一貫して保持されたばかりでなく、國家の强化と共に益々顯著となりつゝあつたとすれば、その頃はじめて成立した統計學がこの性格を顯著に反映してゐたのも怪しむを須ひないであらう。即ち統計學は十七世紀の中葉獨逸に於て國勢學として誕生したのであつて、創始者はヘルムシュテット大學（この大學は一五七六年から一八〇九年まで存在した）のヘルマン・コンリング教授と言はれてゐる。國勢學とは國家に於ける顯著な事實を系統的に記述する學を意味し、舊くはアリストートルの「政治學」に遡ることが出來る。この書はその後散佚して今では全貌を窺ふに由もないが、殘存してゐる部分、例へばアテナに關する記述を見れば、國家の歷史に始まつて行政・司法・科學・藝術・宗教・習慣等に及んでゐる。中世の暗黑時代が過ぎて文藝復興の光が先づ伊太利に輝き出すと共に國勢學も亦再建され、サンソヴィーノ（Francesco Sansovino, 1521-86）、ボテーロ（Giovanni Botero, 1540-1617）を出した。併し彼等に於ける國勢學には異樣なるものがあり、例へば前者の「種々なる王國及び共和國に於ける政治と行政」（Del governo e administrazione di diversi regni et republiche, 1562）ではその英吉利に關する部分は國家の收入について一頁を、司法について八行を割くに止まり、反之ガーターの階位、議會、戴冠式及び王位繼承の順位等を詳述して居り、より奇體なのは實在せざる理想國をさへも描いてゐることである。またボテーロの「諸國の關係」（Le relazioni universali, 1593）は主として地理的狀態を述べたもので、今日の地政學に接近してゐる。

併し統計學が國勢學としての體系を整へたのは上記の如くコンリングの努力に負ふもので、特にその弟子アッヘンワル（G. Achenwall, 1719-72）はこの體系に始めて Statistik なる名稱を與へたことによつて統計學史上逸すべ

からざる人となつてゐる。アツヘンワルに從へば統計學とは廣義の政體の記述、卽ち一國に關する顯著なる諸事實（Staatsmerkwürdigkeiten）の綜合的記述である。換言すれば政治家及び官吏に缺く可らざる知識體系である。この學派はアツヘンワル及びその行繼者シュレーツアー（Schlözer, 1735-1809）の本據に因んでゲツチンゲン學派とも呼ばれ、國家的要請に支持されて暫くは活潑な活動を續けることが出來たのである。

大學統計派の斯かる體系は統計學を以て純然たる國家學たらしめたが、同時に統計そのものを著しく後退せしめる結果に終つた。蓋しその記述が言辭的であつて數字的でなかつたからであつて、今日の吾人の考へる統計なるものは彼等に取つては殆ど又は全く看却されてゐたのである。國勢の記述といふ以上は、確かに數字的表現の不可能なるものがあるに相違ないが、反對に斯かる表現に依らずんば不可能なるものも尠くない。敢へて數字を用ひうるところにもこれを避けるのは愚かであり無意味である。併し國勢學に於ける數字嫌惡は當時の事情の下にあつては或る程度まで是認しうるものである。第一の理由は當時は相當廣範圍に亘る調査は未だ行はれず、信憑すべき數字が少かつたことで、第二の理由は稀に國家の行つた調査の結果は政府內部に留められ一般に公表されなかつたことである。臆測的數字なるものが如何に危險なるかを顧れば、彼等の態度は寧ろ當然とも考へられる。併く彼等にあつては數字に對する充分の認識からこれが使用を遠慮したのではないようである。ウエスターガード曰く「當時英國及び瑞典の如き若干の國々に於ては住民數及び生命統計の諸問題に關する調査は既に行はれてゐたに拘はらず、この場合にも手許の統計資料を示すことなく單に蓋然的人口を擧げるに止まつた」と。

統計學が成立して却つて統計が壞滅したといふこの矛盾は當然是正さるべき運命にあつたのであつて、この轉換は最初には「表示統計」（Tabellenstatistik）により、次には政治算術（Political Arithmetic）によつて促された。前者は和蘭のアンヘルゼン（Anchersen, 1700-65）によつて代表され、彼の "Statuum cultiorum in tabulis, 1741 に於て用ひられた形式を指すのであつて、國勢の比較に當つて單なる記述を捨てゝ表示を使用するといふ新機軸を出したのである。尤もその表示は依然として言辭的に行はれ、所謂統計表の形式を採つたものではないが、それへの途を開いたことは明かである。大學統計派はこれに對して「表の奴隷」の罵聲を浴せたが、その當らざることは爾後の經過によつて證明された。表示統計よりも遙かに優勢な迫力をもつて大學統計派を脅かしたのは、十七世紀後半に英國に勃興した政治算術である。その目的とするところは社會的大量現象を數字的に把捉することによつてその背後に橫はる正規性を求めんとするに在つた。斯かる要求はベーコン一派の經驗主義の所產と見られるが、これを可能ならしめるためには資料と方法が具はらねばならぬ。當時の社會事情の下に於ては素より統計調査は至難であり、從つて社會的大量現象の數字的把捉と言つてもその範圍は極度に限定されざるを得なかつた。政治算術がその標望を裏切つて單なる人口統計の解析に終始したのも全く資料の關係からである。人口統計は敎會に保有された洗禮及び埋葬の記錄を利用することによつて、特別の調査を俟たずして作成されたのである。他方かゝる數字的資料の取扱ひに缺く可らざる數學は既にデカルト以降相當の進步を遂げて居た。これらの理由によつて政治算術は人口統計學として體系を整へたのであつて、倫敦の一商人ジョン・グラント（John Graunt, 1620-74）の一六六二

年の著書「死亡表に關する自然的政治的觀察」（Natural and Political Observations upon the Bills of Mortality）はこの礎石となつたものである。彼はこの書によつて、一見無秩序の觀ある出生及び死亡の如き現象が驚くべき正規性によつて支配されてゐることを示し、社會事象研究に新たなる領域を開拓したのである。政治算術の名稱は彼の友人ペティー（W. Petty, 1623-87）の著書 Political Arithmetick（この書の執筆されたのは一六七一乃至七六年と言はれるが、出版されたのは一六九〇年である）に負ふもので、この名稱が人口統計を意味することは、例へば最近の刊行にかゝるホグベン編纂の人口研究論集が Political Arithmetic — A Symposium of Population Studies, edited by L. Hogben 1938 と題されてゐることによつても明がである。この派は幾多有能なる學者を輩出し、十八世紀中葉遂にジュースミルヒによつて完成された。アツヘンワルの創造した Statistik の名稱は依然保持されたが、内容は政治算術によつて代位され、國勢學としての統計學は政治學・地理學・歴史學・經濟學・人口學等の諸科學に分裂して了つたのである。

政治算術の目的は上記の如く社會的大量を數字的に把捉することによつてその背後に横はる正規性を發見するにあつた。そこには國家的要請よりも社會的乃至は科學的要請が遙かに強烈であつて、從つて政治算術といはんよりは寧ろ社會算術と呼ぶべきものであつた。この傾向は爾後對象が人口以外に幾多の社會的現象に擴大されるに及んで一層顯著となり、遂にはケトレー（A. Quetelet, 1796-1874）の社會物理學の提唱となり、統計學の社會性は極めて強烈に現はれるに至つた。ケトレー以後統計學は二分され、一方では所謂社會統計學派によつて社會科學的に發達し、ワツボイス（E. Wappäus, 1812-79）、ワグナー（A. Wagner, 1835-1917）、エツチンゲン（A. v. Oettingen, 1827-1905）等を經てメイル（G. v. Mayr, 1841-1925）の「統計學と社會學」（Statistik und Gesellschaftslehre, 1895-1917）に到達した。該書は未完成で終つたとはいへ、この派の金字塔と目しうるものである。然るに他方では統計學を以て統計に關する方法の學と見做すところの所謂方法學派が擡頭した。これには統計の蒐集即ち大量觀察の方法を主たる對象となすものと、統計解析の方法に中心を置くものとがあるが、後者は所謂數理統計學派として今日壓倒的勢力をもつてゐる。數理統計學派はゴルトン（F. Galton, 1822-1911）及びピアーソン（K. Pearson, 1857-1936）等の遺傳學及び人體測定學によつて開拓されたもので、確率理論の發展と見ることが出來る。統計學の本質を斯く規定せんとする傾向は何れの國に於ても極めて顯著であつて、少くともそれをば社會科學と見做す人々は稀である。即ち吾人は統計學を以て一ケの形式科學と見做してよいのである。この點に就ては私は曾て本誌に述べたことがある（第三十二卷第三號、決則に於ける必然性と蓋然性 — Statistik より Stochastik への轉化）。敢へて繰返すを避けよう。

統計學の學的性質が斯かる變遷を辿りつゝあつた一方、統計そのものゝ意義にも著しい變化を示したのである。統計調査はその後益々進歩し擴大して統計の整備は誠に見るべきものがあつた。曾て殆ど人口現象に限定されてゐたものが、他の種々の社會現象、就中、經濟現象に擴大され、同時に人口統計そのものも國勢調査の發達や戸籍法の進歩によつて飛躍的發展を遂げたのである。更に往時に於ては統計の對象として全く看却されてゐた自然現象ま

でが次第に統計化され、天體・物理・氣象・遺傳等については特に見るべきものがある。併し斯かる進歩が特に國家的要請によつて齎らされたとは考へられない。資本主義成立によつて中央集權的國家は崩壞し、國家の支配的地位は單なる保護的地位に轉落して能動的政策は衰退の一路を辿つたからである。換言すれば如上の統計の進歩は主として科學的必要か乃至は社會的要求に促されたと言つてよからう。而も科學的必要も多かれ少かれその時の社會的要求によつて規定されること並びに社會的要求なるものも事實は支配階級の精神によつて規定されることを顧れば、この時代の統計の進歩が資本家的精神によつて最も促されたことは容易に想像しうるであらう。

從來の統計の資本主義的性格は殆ど凡ゆる部門について指摘しうるところであるが、單に、これら統計が特に經濟統を中心として發達したといふ事實を擧げれば足りるであらう。既に述べた通り人口統計その他の發達は確かに駭目するに足るものがある。併しその何れも經濟的項目に於て特に顯著なる進歩を遂げたのであつて、例へば人口の靜態統計に於ては人口の職業及び産業に關する事項が重視され、動態統計に於ても職業別の出生率又は死亡率の如き新たな事項が關心を惹くに至つた。謂はゞ人口統計そのものが著しい程度に經濟統計的色彩を帶びて來たのであつて、同樣のことは文化統計又は道德統計についても言ひうるであらう。これは人間の文化生活の經濟的基礎が益々前面に押出されて來たからである。して見れば人間生活の經濟的側面を獨自の對象とする經濟統計が特別の發達を遂げたことは容易に想像しうるところであつて、最も遲れて登場した經濟統計が次第に他を壓倒するに至つたのも充分理由あることである。蓋し經濟狀態の統計的把捉は資本主義運用の不可缺的前提を爲すからである。斯くてこれら經濟統計が自ら資本主義的精神を强烈に反映し、利潤擁護の手段として構成され利用されるに至つたのは最も自然の道程であらう。

今こゝに個々の經濟統計を列記して、それらが如何に如上の使命を果し來つたかを指摘することは、啻に紙數の關係上不可能なるのみならず、本稿の主題から逸脫する所以でもあらう。よつてこゝでは經濟統計が特に價格統計と勞働統計とを中心として發達したこと及びこれらが如何に資本主義的使命を擔つたかを略述するに止めたい。

資本主義的精神とは言ふ迄もなく利潤の追求である。利潤は貨幣的概念である、即ち價格である。利潤經濟の下に於ては總べては價格を中心として旋回する。自由主義を前提とする限り、物資の量はそれ自體二次的な意義しか持ち得ない。供給不足は價格の騰貴として、供給過剩はこの低落として示されるからである。即ち資本主義の運用が價格統計の上にのみ可能であり、延いて統計がこの方向に構成され利用されることは當然であつて、經濟統計が物資、金融、國際收支、貿易、景氣の如き貨幣現象を主たる對象とし、物資そのものを閑却してゐるのはこれがためである。然るに經濟統計は別に勞働統計をば他の一中心點とする。勞働統計とは勞働階級の狀態及び勞働條件を對象とする統計で、その內には勞働所得及び生計費の如き貨幣的部分もあるが、勞働時間、災害、失業、爭議の如き全然別個の題目もある。勞働統計の眞髓はこれが社會政策の資料たるの點にあるのであつて、從つて勞働統計に對する要請は社會政策に對するそれによつて說明されねばならぬ。惟ふに資本社會に於ける利潤追求の圓滑な行動には、同時にその途上に遭遇する障碍の除去を必要とする。かゝる障碍の尤たるものは勞働階級より來るそれであ

る。資本制生産が無産階級の存在と擴大を必要條件とすることは言ふ迄もないが、この階級の悲慘は幾何もなく彼等の團結を促して資本階級に對する活潑な攻勢を採らしめるに至つた。社會政策の主たる誘因は可及的に彼等の不滿を芟除することによつてその攻勢を鈍らしめるにあるのであつて、畢竟は資本擁護の一手段たるに過ぎない。斯くてその資料たるべき勞働統計の性格は最早や說明を要しないのである。

この趨勢は統計的方法の適用方面に就ても明瞭に窺ふことが出來る。即ち近年に於ける統計の理論と方法の進歩は抽象的には數學的方向に最も顯著に行はれたが、實際的には時系列に關しては物價指數や景氣豫測等について、度數分布については地域的市場研究や大量生産に於ける製品の品質統御（Quality control）等について異常な努力が窺へるのである。

以上資本主義體制下に於ける統計及び統計學の過程を通觀するに、その兩者何れも顯著な發達を辿り來つたことは疑ふべくもないが、併し曾て兩者の有した國家的性格は著しい後退を示したことを認めねばならぬ。第一に統計學に就て見れば、國勢學即ち一ケの國家學として誕生した統計學は幾許もなく崩壞して社會的大量現象を記述する科學即ち一ケの社會學乃至文化科學の性格を帶びるに至り、國家的色彩は勘からず稀薄となつたが、後には更に脫皮して統計集團に關する方法の學、即ち一ケの形式科學と一變し、こゝに於て國家的性格どころか凡ゆるイデオロギー的性格と絕緣されるに至つたのである。統計學の學的本質の斯かる變化は上述の如く科學の進歩の必然的結果であつて、資本主義といふ特殊體制の產物ではない。それは最早や國家的でもなく資本主義的でもない。統計學の

學的本質は社會體制の問題とは關係がないのである。關係があつたのは統計學が未だ實質科學と考へられてゐた時代のことで、その意味では統計學の國家學から社會學への轉位は、確かに國家的性格の社會的性格への變身と認めることが出來る。そして統計學を以て今なほ實質科學と見做す學者——斯かる一派は事實に於て決して尠しとしない——にとつては、上述した資本主義下に於ける統計の社會性の相對的增大と國家性の相對的減少に基いて、資本主義下に於ける統計學そのものゝ國家的性格の減退を云々しうる筈である。唯だ統計學を形式科學の範疇に算べる吾人の立場からすれば、問題は既にこの領域を超えてゐるのである。

反之統計そのものゝ國家的性格の減退は畢竟資本主義の然らしめたものである。自由主義の容認は畢竟國家の指導的役割の否定を意味する。その主たる任務は後見的保安警察的範圍に限定される。斯かる事情の下に於ては統計も亦その主たる需要者は國家に非すして民間である。即ち統計の積極的效果は特に私經濟的利潤追求の手段として高揚されたのである。

以上私は統計學に於ける國家的性格の消滅と統計に於けるその減退とを結論した。併しこれは素より兩者の後退を意味するものではない。統計學が形式科學に轉位したといふ事實は、過去の暗中模索が清算されて正しい軌道に齎されたことを意味し、進歩以外の何物をも物語るものではない。また統計が國家的性格を著しく喪失したといふのも、事實はその社會的科學的性格が壓倒的に增大したためで、決して國家が統計の援用を必要としなくなつたためではない。全體としては統計の進歩は統計學のそれに毫も劣るものではなく、唯だその進歩に於て國家的性格が

相對的に後退したといふだけのことである。

二、國防國家に於ける統計任務の擴大

然るに自由主義は現に異常なる轉換を餘儀なくされてゐる。この體制の包藏する矛盾は既に過去に於て左翼論陣から痛烈な攻撃を蒙りながら、而もこの不死身の怪物はその與へられた軌道を一路猛進した。併し世界恐慌の痛撃はようやくにしてこの矛盾を感得せしめざれば歇まなかつた。右を期として各國ともに多かれ少かれ經濟的自由を控制する必要を生じたが、所謂全體主義國家群はより大なる政治的要求から、單なる控制を超えた強力な統制經濟へと移行した。この政治的要求とは言ふまでもなく強力な廣義國防國家の建設である。惟ふに近代戰の總力戰的特質から、國防國家が國家總動員體制の上に樹立さるべきことは明かであつて、一國の人的物的全資源は總べて統一的意思の下にこの目的に集中されねばならぬ。分散的な個人的意思と計畫を以てしては素よりこの目的を實現することは不可能であつて、こゝに全體主義的理念に基く強力な統制的措置が要求されるのである。

我國の國防體制は遡れば滿洲事變に至るが、眞の確立と飛躍は支那事變勃發以後のことである。充分豫期し得ずして斯かる大戰に突入せざるを得なかつたことは確かに大きな不幸であつて、それだけ國防體制への轉換は急角度に行はれざるを得なかつた。素より最初から一擧にして強力なる新體制を樹立することは不可能に屬し、事變初頭に著しい混亂を經驗したことは周知の事實である。然るに卽戰卽決の夢が破れ長期戰への移行が不可避となるに及んで、强力な國防國家への要請は俄かに具體性を與へられた。事變當初の繼續的な應急策に代つて迫力ある綜合的計畫が登場し、戰爭遂行のみならず、戰後に實現せらるべき新秩序の建設をも目指す全體主義的體制が凡ゆる國家政策の至上命令的目標となつたのである。國家總動員法の制定公布されたのは昭和十三年四月のことで、爾後に於ける統制の目覺しい進展情況は改めて說明するまでもないことである。いまこの新體制に於ける統計の任務とその限界を論ずるに當り、一應統計のもつ政策的意義を規定して置く必要があらう。

總べて統計の有する政策的意義は二重である。一つは政策の前提としてゞあり、他はその結論としてゞある。惟ふに國家政策とは國家が事物の狀態を自己の希望する方嚮に導かんとする計畫的努力の謂ひである。然らば國家が何等かの政策に出づるについては、一方では不滿なる現狀を認識すると共に、他方ではそれが是正された曉の理想の狀態を豫定してゐる筈である。現狀維持政策に於ては現狀と理想狀態とは一致するが、この場合には現に現狀の破壞されんとする懸念が存在するわけで、この懸念の一掃が政策の目標となるのであるから、矢張り依然不滿と理想は存在する。そして政策が有効適切なるがためには誘因たる不滿も目標たる現想も共に正確にして具體的に把捉されてゐることを必要とする。兩者の一方又は双方が曖昧ならば、政策は單に迫力を缺くのみか一定の軌道を與へられぬわけで、これは應急策とは言へるかも知れぬが、本來の意味に於ける政策とはなり得ない。さて統計は事物の現狀を把捉する手段として國家にとつては最も適當なるものである。蓋し國家に於て云々される事物とは殆ど常に巨大なる集團的事實であつて、これは正に統計の對象に外ならぬからである。國家は統計を通じて事物の現狀を知り、それが自己の希望と合致してゐるか否かを判定して以て對策の必要なるや否や及び如何なる對策を講ずべき

かを決定する。例へば人口統計によつて出生率の低下が判明すればこそ國家がこれを不滿と判定して以て增殖策が講ぜられるのであつて、假りに人口統計なしとすれば出生低下を確認することは出來ず、延いて對策を講ずるに由がないであらう。政策の前提としての統計の意義はこゝにある。次に、或る政策が實施されゝば當然以前の狀態は變化する。（現狀維持政策に於ては破壞要因の狀態が變化する）。政策の効果程度は政策によつて實現せられた新たな現狀が、出發點たりし狀態から幾許の變化を來したか及び目標たる理想狀態に幾許の接近を示したかによつて測定される。卽ち政策によつて實現せられた新たな狀態を正確に把握することが、政策の効果を結論する不可缺の手段であつて、これは同じく統計の援用に俟たざるを得ない。政策の結論としての統計の意義はこゝにある。

今や國防體制の樹立に當つて舊體制の一新が要求される。蓋し目標は既に明かに與へられてゐるからである。國家が現狀に對する不滿と實現せらるべき理想とを最も强烈に感得してゐることは當然であつて、國家政策の擴大と强化は必然の要求となつた。而も國家の增大的支配力は斯かる要求を實現する可能性を益々高める一方である。然らば上述の理由によつて、國防體制の下に於て統計が國家政策に關聯して果すべき任務は飛躍的に增大したこと明かである。そして既にこの方向への努力は著しく認められる。この際現在の統計が國家の新たなる目標に應じて如何なる變化を示したか、また示さねばならぬかは、統計學者に取つて所謂燃ゆる問題といはねばならぬ。

この變化は二つの方向に超ること明かである。一つは從來の統計を新たなる見地に立つて利用することであり、他の一つは新たな要求に應じうる新たなる統計を作り上げることである。既に今迄に作られてゐる統計もその餘からさる部分は依然として眞實性を保持してゐるに相違ない。この種のものを敢へて利用すべきは當然であつて、唯これらは作成の動機が必ずしも今日妥當するものではないから、無條件の利用は恐らく不可能であらう。そこで或ひは新たなる配列を行ふとか、或ひは特に新たなる解釋を與へる等の必要があるのである。これと同時に未だ開拓されざりし分野に調査を延長して新たなる資料の獲得に努めねばならぬ。往時の中央集權的國家に於て統計の國家的性格の極めて顯著であつたに拘らず、事實に於て統計の果し得た任務の極めて僅少にとゞまつたのは、利用すべき統計も少く新たな調査も大規模には行ひ得なかつた爲である。今日では事情は全く異る。資料は山積し、調査は容易となり、これを處理すべき統計の理論と技術は進歩した。こゝに新體制下に於ける統計の國家的性格が現實的に增大する理由があるのである。舊統計利用の問題は暫く措くとして、現に國防的觀點に立つて統計が如何なる變化を辿りつゝあるかを一瞥しよう。素よりこの短論文に於てその一々を詳細に述べることは許されないから、代表的二三の例を擧げるに止めざるを得ない。就中最も顯著なるものは最近に於ける國勢調査の動向である。

國勢調査は文字通りに解釋すれば一國の富强を決定する一切の要因に亘るべきもので、氣候・風土・領域・資源人口・政治・經濟・文化なぞ一としてこれに包含されざるはない。然るに從來の實績に徵すれば殆ど人口現象に限定され、而もそれすら決して充分なるものではなく、名實の相伴はざる甚だしきものがあつた。然るに昨年八月一日の「物の國勢調査」によつて新たなる領域が採り入れられ、從來の概念は根本的に修正されるに至つた。物の國勢調査とは國民の日常生活に直接必要な衣食住の物資が一年間に幾許消費されるか又その物資が如何なる配給機構を通

して配給消費されるかを明かにせんとしたもので、内閣統計局はその趣旨を説明して曰く「元來物資の消費に關する統計は、合理的な經濟政策や社會政策等を樹立する上になくてはならぬ根本資料として、從來からも極めて必要視せられて來たのであるが、この種の調査は技術的に極めて困難なので、今日迄その實施を見るに至らなかつたのである。……四圍の情勢より察すると、この戰時體制の構へは相當長期に亘るものと覺悟せねばならぬ。この國家的大業を完成する爲めには、國民の堅忍不拔の精神力を涵養すると共に、國防力の强化生産力の擴充といふ大目標に向つて、あらゆる國策を强化徹底せねばならぬが、かやうな政策はいづれも國民生活と密接な關係を有して居り、わけても國策の中心とも云ふべき資金の調達と物資の供給確保とを徹底的に行ふには、必ず國民生活の實狀に卽した方法に依らねばならぬ。卽ち國民は如何なる機構を通じ又如何なる程度に物資を使用しつゝあるか、從つて如何なる部面に節約の餘地があり、その限度が存するかを明かにする必要がある。蓋し今次の調査が計畫された所以も實にこゝに在るのである」と。斯く國勢調査が舊殼を脫して人口から消費に擴大されたのは一に物動計畫の要求に基くもので、この種の要求が緊切になるに從つて生産・財産その他にも擴張されることは必至である。

物の國勢調査と竝んで國勢調査に新局面を劃したものは今秋十月一日の第三回國勢調査に於ける改正である。簡易調査は別として本調査（大正九年と昭和五年）では所屬の産業及び職業を申告せしめてきたが、今回はその現在と昭和十二年七月一日の狀態を共に記入せしめることになつた。これは事變以來の産業改組とそれに伴ふ勞働力移動の實情を求めるためであつて、時局性の極めて濃厚な調査項目である。またこれと竝んで今次調査の特徴をなすものは特殊技能に關する項目である。生産力擴充に於ける障碍の一つは言ふ迄もなく技師や熟練工等の不足であつて、既に國家總動員は勞務統制に關し種々の規定を設け一般的なものとしては國民職業能力申告令（國民登錄制）特殊的なものとしては醫療關係者職業能力申告令其他によつて能力調査を行ふと共に、勞力の維持及び技能者の養成についても大なる關心を示したばかりか、國民徵用令によつて國民職業能力申告令による要申告者を國の行ふ總動員業務に從事せしむる非常手段をさへ採るに至らしめた。何れにせよ總動員法による能力申告令が遵守されゝば格別の調査を必要としないわけであるが、國民登錄制は各人をして自ら職業紹介所長に、他の申告令は地方長官その他に申告せしめるのであるから、到底完璧を期し難い。今次國勢調査が特に指定技能の欄を設けて該當者に記入の義務を課したのは極めて時宜に適した方法といへよう。

凡ゆる統計調査のうち最も大規模な國勢調査が斯く國防經濟的轉換を示す以上、既存の他のより小規模な諸調査が類似の軌道を辿らない理由はない。生活費問題の中核たるべき生計費指數は內閣統計局が事變勃發の昭和十二年七月以降毎月發表し（これは勿論偶然の一致に過ぎなかつたが、その効果は正に量り知る可らざるものがある）、昭和十五年一月及び二月には川口市、川崎市、名古屋市、大阪市及び山田町（福島縣）の一八工場六鑛山に屬する一〇四〇世帶について特殊家計調査を、また本年六月には臨時勞働及技術統計實地調査を施す等、一々列擧すれば限りがない。個人所有の金や木炭の調査に至つては、最も緊急なる要求に出づること勿論である。

現下の國家政策が著しい程度に統計に依頼しつゝあること、そして事實統計がこれに應じて顯著なる改造と擴大

の一路を辿りつゝあることは最早や縷説を要しないであらう。一度び失はれた統計の國家的性格は異常なる速度を以て復活し、而も今後に於ける國防體制の進展は恐らくこの傾向を加速度的に增大せしめねば歇まないであらう。併しこれに關聯して二ケの重要問題がある。第一は、統計の斯かる國家的性格の恢復も統計學の本質には何らの影響を與へるものでないこと、及び第二は、政策に於て統計の果す任務には大なる制限の存すること之である。

第一の問題は實は自明の理であつて、特に論及するまでもないとも思はれるが、誤解を防ぐために簡單に述べて置かう。既に屢れた通り統計學が曾て國家學として規定されたのは、社會的大量記述の學と考へられたからである。併し統計學が一度び實質それが後に社會學として規定されたのは、社會的大量記述の學と考へられたからである。併し統計學が一度び實質科學の域を脫して形式科學として規定された今日に於ては、たとへ統計そのものが如何に强烈な國家的性格を獲得したところで、統計學自體の性格は毫も左右されるものではない。それは依然として大量現象の數的把捉に關する方法である。それは恰も國防體制の下に於て數學の用途が增大しても數學自體の本質は依然として數の論理たるをかへないのと同じである。統計學は最早や社會學にも國家學にも還りうるものではない。唯だ吾人は常に科學の本質と實踐的意義とを峻別する必要を忘れてはならぬ。科學の本質は不變としてもその實踐的意義即ち任務が時の事情によつて變化するのは當然である。生產力擴充の要請下に種々の自然科學が俄かに重視されて來たのはこの適例といへよう。統計學についても同樣のことが言へるのであつて、今後に於けるその實踐的意義は增大の一路を辿るに相違ない。併しその推進力は一に統計そのもの、國家的任務の增大に求められるべきで、謬つてこれを統計學の

本質的變化に歸し、往時の國家學への復歸を結論するが如きことがあつてはならぬ。

第二の、政策に於ける統計の限界については節を改めて論ぜねばならぬ。

三、統計の政策性に對する妨碍的要素

(1) 統計の本質より來る妨碍

國家政策の企畫と遂行とに於て統計の分擔する任務は上述の如く極めて大なるものがあり、その程度は國防經濟の進展に比例して益々高められるであらう。これが充分に評價されなければ國家政策の完璧は期し難い。同時に吾人はこれに對する過當の評價を嚴に警戒する必要がある。統計は有力な武器である。併し萬能な武器ではない。始めて統計的研究法が經濟學に現はれたとき、一部の學者、就中アメリカのそれは、これを以て恰も經濟學に於ける唯一の方法なるかの如く解釋した。その代表的なるものが統計的景氣研究の一派であつた。然るに幾許もなく斯かる方法の缺陷は如實に示されたのである。今や統計は新たなる任務を課せられた。もし再び統計萬能の風潮が擡頭すれば、過去に犯された誤謬の轍に再生するのみか、それは遙かに決定的な害惡を與へねば歇まないであらう。蓋し統計の新たなる任務は國策の決定及び遂行といふ最高使命に直接關係するからである。

斯くて吾人は國防經濟との關聯に於て統計の果しうるものと果し得ざるものとを明確に認識せねばならぬ立場に導かれた。この問題を根本的に究明する爲には一應統計學の本質に立ち戻る必要があるが、私はこゝでその點まで深く堀下げるつもりはない。唯だその際の問題の在所は第一に、統計學的に求められた結果は時と場所とに制約さ

れた規則性を出でず、常に一ケの蓋然値であつて決して事象の本質乃至法則を示すものではないといふことである。これは既に得られた統計的結果をそのまゝで政策の指針とすることは許されないことを意味する。併しこの障碍は統計的法則の蓋然性に關する正しい理解によつて著しい程度に克服しうるものである。蓋し起りうる誤差の範圍は理論的に決定されうるからであつて、從つて如上の障碍から統計の實踐的意義を否定するのは統計理論に對する無理解を表明する以外の何物でもない。併し同時に、統計理論そのものに未だ少からざる疑點を藏する今日の事情の下に於ては、如上の障碍を全く無視してよいものでないことは勿論である。

第二に、統計の範圍は事物の量的側面に限定されるといふことである。これは素より自明の理であるが、この障碍が統計的方法の領域を縮小することは極めて大なるものがある。勿論吾人は表現の正確を尚ぶが故に、凡ゆる方面に於て絶えず質を量に轉換する努力を續けてゐる。例へば從來漠然たる表現しか許されなかつた人間の智能も次第に數字的に示されるに至つた。かゝる努力の結果は直ちに統計に利用されて、それだけ統計の領域を擴大しつゝある。これに關しては曾て「統計比較の諸問題」と題して多少詳細に本誌上で論じたことがある（本誌第三十〇卷第〇號）。何れにせよ或る社會組織の下に於て統計が特に進歩するか否か、延いてその利用性が增大するか否かは、その社會組織が質の量的表現を容易ならしめるか否かに懸るところが極めて大きい。いまこの觀點から國防經濟を舊體制に比較すれば、一方では有利な、他方では不利な事情の生じたことを認めねばならぬ。

先づ第一に有利な事情とは、統制は質の上にも強化されるといふことである。國防經濟の要請たる生產力の擴充

物資の節約乃至は價格の統制は綜合的計畫的の規格統一を不可缺の前提とする。素より規格統一の概念は大量生產と不可分の關係にあつて、資本主義的生產の開始と共に導入され、就中產業合理化によつて一段の進歩を見たものである。併し個々の企業が獨立の經濟單位をなしてゐた當時にあつては、規格統一の誘因は單に自己の生產費を低下せしめることによつて、自己の利潤を高めんとすることであつた。この目的の爲に工業統計が著しい發達を遂げたことは既に一言したところであるが、元々各經濟單位間に充分の聯絡がない以上、規格統一も全く內部經濟の問題に過ぎず、國民經濟的には依然として無限に多種多樣なる商品が氾濫してゐたのである。統制經濟の下に於ては斯かる混亂は當然是正されねばならぬ。規格統一が一企業に與へた利益は今や國民經濟に與へらるべく、これには全企業を一貫する規格統一が必要となる。これは軍需品については、需要が國家といふ單一者の獨占である關係から舊くから容易に行はれてゐたが、今日では一般商品についても加速度的に實行されつゝある。その結果として商品種類は著しく減少し、例へば數百種に上つてゐた菓子類が僅か十數種に限定された有樣である。簡素なる新生活樣式は着々實現しつゝあるから、右の趨勢は今後凡ゆる方面に益々及ぼされるであらう。この現象は統計調査の上には夥しい利益を與へるに相違ない。從來經濟統計が殆ど價格統計の觀を呈してゐたのは、品質が輕視されてゐた爲ばかりではなく、實は品質が多過ぎて取扱ひ切れなかつた爲でもある。この不便が減殺されゝば質の分類は容易となるから、延いて質を一應價格といふような數量に轉化するまでもなく、直接に質を規準とする統計も可能となら う。況や量への轉化がこれによつて極めて容易となることは勿論であつて、もし度量衡制度がより統一されるなら

ば更に助長されるであらう。後者は永い傳統に束縛され、平時に於てはこれが改良は極めて困難であるが、强力な統制經濟の下に於ては可能なばかりでなく最も必要なのである。

然るに國防經濟には統計に與へる如上の有利なる影響を正に相殺する、否、相殺して餘りある特質がある。價格經濟の後退と全體主義的體制の登場これである。前者について見るに過去に於ける統計の著しい進歩は資本主義社會の價格中心的構造に負ふところが最も多い。價格は經濟價値なる質の量的表現である。經濟活動の目的が經濟價値の獲得にあるとすれば、價格現象は凡ゆる經濟活動の尺度となり指標となる。即ち價格を通じて經濟の本質に觸れることが出來たのである。而も價格は貨幣なる共通の媒介物によつて示されるから、これを統計化することも極めて容易だつたのである。然るに國防經濟に於ては從來の價値概念は根本的に改められねばならぬ。即ち從來のそれが交換價値を意味したに對して今や國防的意義に於ける使用價値を意味せねばならないのである。これは貨幣經濟の物資經濟への轉換を意味する。物の價値は國防目的の見地から決定され、貨幣的利潤的見地に立つ從來の意義に急速に失はれる。そして既に自由價格が控束價格に代置されゝば、價格の支配力は極めて薄弱となり、價格は經濟の本質を示し得ないのは勿論のこと、その主たる現象とさへも認め得なくなる。斯くて從來質の量的表現に最も効果的だつた價格の轉落によつて、經濟現象の統計化は最も有力な手段を失つたわけで、今迄の價格中心の統計の多くは既に利用價値を著しく喪失して了つた。價格が公定されて了へば價格の動きによつて需給の調節を圖ることは不可能となる。斯くて例へば物價指數や價格指數等は今や重大なる危機に臨んだのであつて、もし重要商品全部に公定價格が與へられゝば（これは恐らく必至の運命であらう）物價指數は不動となり、指數の意義は全く失はれるであらう。

註　現在に於ける物價指數の非妥當性は實際の市場價格を示し得ない事情から起つてゐる。所謂閣相場は素より不法價格であるから、政府がこれを認めて物價指數に算入することは出來ない。不法價格の橫行は統計の不徹底に基くが故に、私は曾て、公定價格と閣相場の兩者から作つた二つの物價指數を比較することによつて、統制の徹底度を判定する係數を求めうるであらうと述べたことがある。然るに本年三月以降、東京市では市内の約二百世帶を選び、實際に支拂つた購入價格を申告せしめることによつて現實の小賣物價指數を作成してゐる。八月分指數は内閣の二一四・二に對し二三三・五（基準は共に事變直前）即ち約九%の差を示し從來の方法による指數の非現實性を證明してゐる。

價格統計は斯くて數量統計に位を讓らねばならぬ運命にある。上述の如く規格統一によつて特定商品の種類が減れば數量統計は著しく容易となるが、而もこれは一特定商品についてのみ言へることで、凡ゆる商品に關する數量統計は如何なる手段を以てしても不可能である。蓋し商品の數量は商品によつて表し方が異るからで、たとへ現在の混亂的度量衡制度を統一したところで貨幣の如き單一的尺度を得られる筈はないから　綜合的數量統計なるものは求むるに由がないのである。

併し國防經濟に於て價格の優位の失はれることは避け難いとしても、價格そのものが消滅するわけではないから、價格統計も亦全く否定さるべき理由はない。恐らくそれは數量統計の缺陷に對する補助手段として特殊の價値を生むであらう。この點こそ統計學に課せられた今後の最も大きな問題の一つと考へられる。

(2)　統計の技術より來る妨碍

統計のもつ斯かる本質的障碍を別としても、單なる統計技術上の各種の障碍が統計をして國家政策への參劃を著しく困難ならしめてゐるのである。こゝに言ふ技術上の障碍とは主として統計の調査及び編整に於て遭遇するそれを指すのであつて、畢竟資料の正確性と利用性との上に横はる困難に外ならない。先づ第一に統計の要諦は事實を正確に記述することによつて信憑しうる資料を提供するにある。然るにこの要請は如何なる場合にも多かれ少かれ阻害されてゐる。常に免れ難いのは無意識的又は意識的な嘘僞の申告である。無意識的嘘僞とは無智又は誤認に基くもので調査範圍の擴大と共に增加する傾きがある。無智そのもの排除は一般文化の向上に俟つ外はないが、誤認は調査事項の複雜なるに起因するところが多いから、意味を充分に說明すれば減少せしめられる。今回の國勢調査に於て詳細なる職名表及び指定技能表を添付したのは適宜の手段である。併し同時に調査事項そのものゝ簡易化が望ましく、この意味に於て既に述べた商品の規格統一の如きものが統計調査に與へる利益は極めて大なるものがあらう。

これに對して意識的嘘僞とは自己の名譽心や利害心から故意に事實を曲げることで、所得や年齡の申告の不正確さの大部分はこの理由に基くのである。國民體力法の實施に當つては檢診に際して既往症の供述が必要となると思はれるが、恐らく相當の困難を伴ふであらう。國民優生法に於ける惡質遺傳病についても亦同じである。結核や癩病に關しては我國は特に愼重の對策を講ずる必要があり、現に財團法人結核豫防會や國立癩療養所等の優れた施設もあるが、國民の間に斯かる疾病を陰蔽する傾きが少くなく、これでは如何なる施設もその機能を充分に發揮しうる筈はない。また統制の强化には國家が個人の日常生活について出來る限り詳細な報道を求めることが不可缺の前提となるから、消費狀態所得又は財產等についても遙かに立入つた調査が行はれることにならう。既に貴金屬の强制買上の前提としてその所有高を申告せしめたが、この種の措置は今後他の種の財產についても必ず行はれることゝ思はれる。また日用品切符制度の前提としては世帶人員を申告せしめ、綿製品販賣禁止に際しては在庫量を申告せしめるが如き、何れも直接間接に個人的利害と關聯する。故に例へば橫濱市に於ける切符申請人員が實際人口を一割近く超過したとか、所謂無籍綿製品が闇を流れるといふが如き結果を生ずるのである。

斯かる嘘僞の申告を防止することは統計の效果を增進せしめる上に於て最も緊急な事柄である。これには第一に は調査方法の改善を必要とする。年齡の申告に於て數へ歲または滿歲の代りに生年月日を記入せしめる方法が嘘僞防止の效果あることは既に認められ、我國の國勢調査では最初から用ひられてゐる。配遇關係の調査に於て屆出の有無の別を問はざる方法も、我國の如く特に內緣關係の多い國では特に必要である。併し技術的改善より期待される效果は恐らく甚だ大なるものではあり得まい。申告に於ける嘘僞の主たる誘因たる虛榮心や利害心の矯正は、畢竟人間の人生觀社會觀乃至國家觀の矯正に俟つ外はない。社會の表面的組織は現に自由主義から全體主義への移行を顯著に示しつゝあるとはいへ、最も肝要な國民の精神的心構へが同じ程度の變化を辿りつゝあるとは考へられない。卽ち嘘僞の程度を酌酌することはいつの世に於ても怠る可らざる事柄である。

如上の統計調査の上から起る障碍と相竝んで統統の効果を減殺しつゝあるものは、利用に際して生ずる障碍である。統計調査が近時著しく擴大され乍らその結果が一般に公表されざることは遺憾ながら事實である。併し戰時に於て常に事實の公表を要求するが如きは素より許さるべくもない。これは統計の利用者にとつてこの上もない不幸であるが、この事は決して國家政策に於ける統計の効果を傷ふものではない。否、或る見地からすれば、寧ろこの反對が結論されるのである。先づ第一に國家が敢へて統計調査を實施するについては豫め一定の目的がある筈である。この目的はこれを自己の用途に利用することであつて、これを公表することによつて社會的に又は科學的に便利を與へるのは謂はゞ附隨的目的に過ぎない。換言すれば統計の公表されると否とは豪もその國家政策的効果に關係をもつものではない。次に統計の非公表によつて却つてその國家政策的効果を增進しうるといふのは、一に國內の主要事項を外國から陰蔽することによつて安じて獨自の政策を講じうるからである。所謂防諜の問題これであつて、他國の知らんと欲する事柄は素より單なる個人的意見や個々の出來事ではなくて、主として統計的事實である。然るに統計は費用及び勞力のみならず、調査の徹底を期するために申告を義務化する必要なぞによつて、大規模な調査は殆ど國家の仕事である。即ち一般に統計の最大の利用者と生產者は共に國家だといへる。斯く自己の權限內にある事柄について秘密を守ることは容易でもあり必要でもあるといふことになる。卽ち統計の非公表は直接にはその國家政策的効果を促進することはあつても減退せしめるものではない。併しながら斯かる秘密主義が一定の限界を超して押進められるときは、如上の効果も却つて傷はれざるを得ないであらう。如何なる事情の下に於ても國家が國民の創意と科學の進步を離れて獨り向上しうる筈はない。然るに國內の主要事實が悉く民間から陰蔽されるならば、國民の政治的關心は冷却し科學は現實性を喪失して國家政策への眞摯なる參劃も貢獻も期待し得ざるに至るであらう。事變以來人口及び經濟に關する幾多の統計が吾人から遮斷され、これらに關する實證的研究は著しく妨げられてゐる。素より官廳では多數の學者を動員して內部に於て獨自の研究を進めてゐるが、科學の眞の發達がこの方面から期待し得ないことは言ふまでもない。そして眞に効果的な國家政策が常に强固な科學的基礎の上にのみ樹立され遂行されることを願れば、誤つて科學的資料としての統計までを陰蔽することが如何に不得策なるかは明かである

統計利用上の他の一大障碍は、大規模の調査に於ては調査時點と利用時點との著しく隔つてしまふことである。國勢調査の如きは調査結果の全貌が判明するには曾ては十年以上を要した。統計機關の整備や熟練の增進によつてこの期間は時と共に短縮され、今秋の國勢調査は調査項目の異常な增大に拘らず約三ケ年にして整理を完了する見込みだといふ。併し既に述べた通り、今次國勢調査は國防經濟の中心たるべき生產力擴充計畫への資料を特に目的とするものである。目的の緊急さを一考すれば、整理に要する三ケ年の時日は餘りにも長過ぎる。戰時の一ケ年は不時の恐らく十年にも匹敵しよう。統計の完成した瞬間にそれが既に新鮮味を喪つてゐるとすれば、これより多分の實踐的効果を期待することは出來ない筈である。

然らば調査時點と利用時點との間隔から生ずるこの困難に如何にして對處すべきか。統計機關の能率の向上がよ

くこの間隔を短縮しうることは既に一言したが、これは統計局及び統計課の人員及び機械の擴充を意味する。現在の機構を見るに、內閣統計局は兎に角として、各省又は各府縣廳の統計課は人員も少く設備も極めて貧弱である。加之、その少い人員が必ずしも全部充分な統計學的素養をもち合はせてゐるとは言へないようである。卽ち多數の且つ有能な專門家と優秀な統計機と を各統計機關に配置することが第一の要件である。併し國家の必要上行ふ統計調査は時と共に加速度的に增加する一方であるから、如何に統計機關を擴充したところで——而も少くも現下の狀態ではこの方面に相當の豫算の割かれる可能性は極めて少い——到底追ひつけるものではない。そこで第二の對策として調査自體を簡易化する方法が考へられねばならぬ。これは更に二つの方法に分けうるのであつて、一つは多種なる調査を重點主義によつて取捨選擇することであり、他の一つは大規模の調査の代りに小規模のそれを以てすることである。前者に就て見るに、今日の多種多樣なる統計調査は著しい程度に官廳內部の群雄割據的性格を反映し、統一性を缺くこと夥しいものがある。殆と同一事項が幾つかの官廳によつて調査されることは珍らしくなく、その際各々の方法が違ふために結果も違つて來て、何れを信賴してよいかについて疑念を生ぜしめるばかりでなく、被調査者は煩に堪へ調査に熱意を示さなくなるであらう。一般に統計調査なるものは直接個人に利益を齎す性質のものではないから、申告に正確を期するには一方では法律的に義務化すると共に、他方では各人をして進んで調査に協力せしめることが肝要である。これには調査の主旨を了解せしめると共に、申告自體を本人に迷惑と感ぜしめぬ工風を凝さねばならぬ。もし各種統計機關が適當に聯結されるならば、無益な重複調査の弊は一掃され、費用及び勞力にも著しい節約を來しうる筈である。そして斯くして得た餘力は新たな調査に向けることが出來、全體として活動範圍は著しく擴大されるであらう。併しその際にも無方針な擴張は決して統計の價値を增進せしめる所以ではない。現在の體制下に於ては總ての國家政策は國防國家の建設に目標を置いてゐる。然らば多種多樣なる統計調査もこの觀點によつて輕重の別が生ずるわけで、殊に今日の如く統計調査が多分に舊體制時代の傳統乃至惰性によつて律せられてゐる事情の下では、存在理由の疑はしいものも尠くない。卽ち統計調査も亦强力國防國家の建設を目標として一應根本的に檢討され、新たな秩序が與へられねばならぬ。そして特に現在の如き、極めて局限された費用と勞力を前提とすれば、これを全體に分散する代りに特に重要なるものに集中することが望ましい。卽ち上記の統計調査の再編成とは要するに調査に於ける重點主義の適用を意味する。そしてこれが一に官廳相互の融和統合によつてのみ可能なことは旣に述べたところから明かである。併し斯かる融和統合が果して實現しうるか否か、吾人は從來の經驗に照して多分の疑念なきを得ない。

右の重點主義がたとへ承認されても、國家活動の加速度的膨張の下に於ては重點と認められるべきもの自體が極めて多く、且つ今後は一層增加の一路を辿るに相違ない。然らば徒らに重點主義を固守すれば、限られた費用と勞力の下に於ては、重點の重點、そのまた重點と無限の縮小的選擇を餘儀なくされ、廣汎な國家政策の大部分は統計利用から絶緣されるに至るであらう。斯かる結果は統計の任務から見て決して歡迎さるべきことではない。そこで重點主義と低觸せずして而もその弊を撓めうる手段はないであらうか。これに肯定的解答を與へるものが代用調査の理

論である。惟ふに本來の意味に於ける統計とは、與へられた統計集團を構成する各單位を一定の標識によつて洩れなく數字的に把捉したものである。故に統計集團の大なる場合には、この所謂悉皆調査は當然多大の費用と勞力を必要とする。例へば今回の國勢調査の費用は國費一千三百三十六萬圓、地方費約二百萬圓、合せて約一千五百四十萬圓で、動員される調査員の數も二十五萬八千人に達する。調査毎にかゝる尨大な犧牲を拂はねばならぬとすれば、當局は餘程の必要に迫られぬ限り新規の調査を躊躇するであらう。然るに統計調査の一部に間接調査及び部分調査と稱せられるものがある。前者は直接に統計を求むるを目的とせざる或る手續に於て自ら生ずる計數的結果を利用して統計となすことで、斯かる統計を一般に二次統計といふ、出生屆より出生統計を、稅關の記錄より貿易統計を作成するが如きこの例である。二次統計はその性質上、これに要する費用や勞力は殆ど言ふに足りない。故に今日の如き事情の下に於ては大いに利用されて然るべきものであるが、これには相當の前提を必要とする。二次統計の缺陷は統計の不可缺的要件たる概念統一が動もすれば缺けてゐることである。統計調査に當つては單位や調査事項は固より豫め概念的に確定されてゐなければならぬ。人とは何か又は年齢とは何か等が判明してゐなければ人口統計は求められない。そこで逆に、概念規定に特殊の困難を伴はざる事項については二次統計も可能性が多いわけで、出生とか死亡とかゞ何であるかは——科學的には種々の問題もあらうが——一般には明白であり、從つて出生屆や死亡屆は直ちに統計調査票として利用されうるのである。然るに不幸にして大部分の統計に於ける諸概念は斯くの如きものではない。それは時により處によりまた人によつて異つて解釋されうるものである。貨銀・失業・所得・國富なぞが問題となる場合、吾人は先づそれらの定義から出發する。定義とは合理的概念規定に外ならず、一々の場合に定義を必要とする事實は、概念に混亂の存する證據である。さて二次統計は行政又は業務の手續に際して自ら發生するものであるから、概念は各々の便宜に從つて規定される。いま各會社の賃銀支拂簿から賃銀統計を求めんとするに、何を以て賃銀となすかは各會社によつて必ずしも等しくないから、機械的にこれを集計しても得るところはない。さりとてこれらを一定の標準に換算することは煩雜か乃至は不可能であらう。即ち斯かる資料から賃銀統計を求めることは不可能にちかい。改めて賃銀調査の必要なる所以である。この場合には豫め設けた規定や分類に從つて全體の統一を期しうべく、從つて所期の賃銀統計が得られるのである。

斯かる理由によつて間接調査は著しく制限されてゐるが、私は統制體制の强化はこの制限を次第に緩和しうるものと考へたい。蓋し何事についても統制を加へんとするには豫め概念を明白に規定することが先決要件となるからであつて、統制は概念の統制に始まると言つても過言ではあるまい。特に物資動員及び物價統制に關聯して商品種目を減らし規格を統一しつゝあることは、經濟統計の領域にも二次統計の可能性を增大せしめる所以である。

間接調査と竝んで統計調査を簡易化するものは部分調査である。部分調査とは統計集團を構成する全單位の代にりにその一部を調査することであつて、部分が全體の縮圖と認められる場合には、これより推して能く全體を知りうる筈である。そして單に費用と勞力とを大いに節約しうるばかりか、整理に要する時間も著しく短縮され、既に述べた調査時點と利用時點との隔りから生ずる不利を減殺しうるのである。部分調査はその種類甚だ多く、現に廣

い範圍に亘つて利用されてゐる。物價指數や家計調査は極めて小さい部分から、輿論調査や坪刈りは多少大きい部分から、勞働統計實地調査は極めて大きい部分から全體を推す方法である。國勢調査結果速報も亦全調査票の一部からの結果の敷衍であるから、明かに部分調査であつて、如何に整理時間を節約しうるかを證明してゐる。併し同時に、速報が後に發表される決定結果と一致し得ないことは、部分調査が悉皆調査に及ばざる證據である。故に吾人は無條件に部分調査を推賞しうるものではないが、もし吾人にして充分の統計理論に立脚するならば、起るべき誤差の程度は可成り正確に測定することが出來るのであつて、統計學の實踐的價値はこの點に於て特に顯著なるものがある。

四、結論——國家政策に於ける統計の限界

國家の指導的役割の增大が國家政策への統計の參劃を異常なる程度に要求し來つたこと、統計がこれに應じて既に顯著なる任務を果しつゝあること、而もその任務遂行の途上に於て大小樣々の障碍に遭遇しつゝあることは、以上によつて略々明かであらう。そしてこれら障碍の或るものは統計の本質から見て固有のものであり、また或るものは國防體制の進展によつて齎されたものであることも亦明かにされたと思ふ。よつて吾人は統計をして新たなる使命に卽應せしめるためには、一方では途上に横はる障碍の可及的克服に努力すべきは勿論のこと、同時にその果しうる任務の限界を明確に認識することによつて統計に對する信賴性を擁護せねばならぬ。不可能事を要求し又は敢へてこれを遂行せんとするが如きは、何事に於ても百害あつて一利のないこと明かだからである。併し統計が如

何なる限界を有するかは、個々の統計が上述の各種障碍を幾何の程度まで蒙つて居るか、そして幾何の程度までそれらを克服しうるかに懸ることで、一々の統計について具體的に判定する外はない。統計一般を捉へて、それはこれ〳〵の程度までのことは爲しうべく、それ以上のことは爲し得ない、といふが如き抽象的一般的議論は毫も問題を解決する途ではない。乍併、個々の場合に判定するといつても、判定の基準は畢竟は透徹せる統計理論に求めざるを得ないことは明かである。政策の偏重が陷り易い理論の閉却は、吾人の最も戒心すべき事柄である。

唯だ最後に結論として一ケの抽象論を許されたい。それは全體主義と統計との關聯である。國防國家が公益先行の理念と構造の上にのみ可能なることからして、それが實現された曉には、社會は最早や個々の獨立單位の無機的集合物に非ずして、一ケの統一的理念の下に總括された有機體である。然るに統計學は常に集團に於ける各單位の獨立性を要求する。これは確率論の重要な前提であつて、確率論的に構成された統計學が集團事象の解析に偉力を發揮するのは一にこの條件の充たされた場合である。景氣の統計的豫測が充分の効果を擧げ得なかつた主たる根據は、對象とされた諸事象が相互に必ずしも獨立してゐないからである、事象の斯かる非獨立性は實は社會領域に於ては從來と雖も到るところに於て遭遇したのであつて、統計の効果が世人の期待を裏切ること大なりし最大の理由も、遡ればこゝに至ると言つてよいのである。併し今迄はこの非獨立性は多くの場合、その範圍が狹く、社會全體に就ては上記の如くこれを一ケの無機的集合物と認めることが出來、こゝに統計の優位を主張すべき根據があつたのである。

然るに全體主義的社會構造の下に於ては、如何なる部分も全體との關聯を離れては無意味である。そこには獨立性なるものは全くあり得なく、延いて統計理論は斯かる構造については無力とならねばならぬ。故にもし全體主義的政策なるものが眞に登場するならば、斯かる政策への統計の參加が根本的支障を受くべきは當然である。アドルフ・ブリンドはその「國民經濟の全體主義的性格と統計」なる一文に於て、斯かる社會に於ても依然として存續する一部の個別性と從來と異る概念の規定とに據つて、この困難を克服しうるが如き改造が可能であると論じてゐる(A. Blind, Der Ganzheitscharakter der Volkswirtschaft und die Statistik, Festgabe für F. Zizek, 1936)。勿論全體主義が現實に於て理念通りに實現することはないであらう。人間そのものが現在と全く別のものに一變しない限り、凡ゆる點に於て私利を公益に先行せしめうる筈はないからである。この限りに於ては社會細胞の獨立性が根絶せしめられる日は來ないであらう。併しこの方嚮への努力が今日の凡ゆる政策の基本たることは疑ふべくもない。

言ふ迄もなくこれは國家政策との關聯に於て言ひうるに止まり、統計的方法そのものゝ危機を意味しない。凡ゆる研究に於て特に一部を他から遊離せしめる方法は、單に是認せられるのみならず、常に極めて効果的なのである。社會事象が相互に如何に密接な關聯を示す時代となつても、個々の問題を遊離的に取扱ふ方法は依然として生命を保持せねばならぬ。

勞働者政策の基本問題

藤林敬三

內容

一　問題の出發點
二　勞働生産力と勞働者政策の意義
三　勞働者政策の科學的基礎、勞働の人間的構造と勞働科學
四　勞働者政策の課題
五　補論

一

先づ問題の緒を摑むために、私は次ぎのやうな解釋から、本論を始めたいと思ふ。

勞働者政策は勞働者の勞働生産性の增大を通じて、一國の勞働生産力の增進に役立たんとするものである。從つて勞働者政策は生産政策としての意義を持ち、國民經濟的生産力增進の問題に關する重要な一面を構成するものである。